

邪義可有問答候歟。委細之旨別一卷書進候也。又日蓮相承法門血脈髓奉註之。恐恐謹言。

文永十二乙亥二月二十八日

日蓮花押

最蓮房御返事

一六六 瑞相御書

夫天變は衆人のおどろかし、地天は諸人をうごかす。佛、法華經をとかんとし給時、五瑞六瑞をげんじ給。其中に地動瑞と申は大地六種に震動す。六種と申は天台大師文句の三釋云、東涌西沒者、東方青主肝、肝主眼。西方白主肺、肺主鼻。此表眼根功德生、鼻根煩惱互滅也。鼻根功德生、眼中煩惱互滅。餘方涌沒表、餘根生滅亦復云云。妙樂大師承之云、言表根者、眼鼻已表於東西、耳舌理對於南北、中央心也。四方

【系年】文永十二年二月(54) ④ 四條氏へ【真蹟】7紙断 身延會存(意・乾録等) 【寫】イ延山録外 朝師本 【刊】外 7 遺 20, 縮 1338 【註】微上 30 考 329

①のニヲ(脚)

①[文...日]12字一連(脚) ②[日...押]4字一① ③蓮十(脚)④(正中二年乙丑十二月廿日 今元德二年庚午卯月十二日於身延山久遠寺重寫之也)十⑤(貞治三甲辰仲夏三日書寫畢、執筆日朝)十(脚)

身也。身具^ス四根^ニ。心徧^ク緣^ス四^ヲ。故^ニ以^テ心對^フ身而爲^ニ涌沒^ヲ云云。夫十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のごとし、正報は體のごとし。身なくば影なし、正報なくば依報なし。又正報をば依報をもて此をつくる。眼根をば東方をもつてこれをつくる。舌^ハ南方^ハ鼻^ハ西方^ハ耳^ハ北方^ハ身^ハ四方^ハ心^ハ中央^等。これをもつてしんぬべし。かるがゆへに衆生の五根やぶ(破)れんとせば、四方中央を^①どろう(駭動)べし。されば國土やぶれんとするしるし(兆)には、まづ山くづれ、草木か(枯)れ、江河つくるしるしあり。人の眼耳等驚^{ミヤウ}そう(躁)すれば天變あり。人の心をうごかせば地動す。抑^{モレ}何^レの經經にか六種動これなき。一切經を佛とかせ給^ヒしにみなこれあり。しかれども佛法華經をとかせ給はんとて六種震動ありしかば、衆もことにをどろき、彌勒菩薩も疑^ヒ、文殊師利菩薩もこたへしは、諸經よりも瑞も大に久ありしかば、疑も大に決しがたかりしなり。故^ニ妙樂云、何大乘經^ニ不^ニ集衆放光雨花動地^ニ。但無生^ニ於大疑^ニ等云云。此釋の心はいかなる經經にも、序は候へども此^レほど大なるはなし、となり。されば天台大師云、世人^{おもへらく}以蜘蛛掛^{レハ}則喜來、鴉鵲鳴^{レハ}則行人至^{ルト}。小尙有^リ徵大焉無瑞。以^レ近表^ニ遠^ニ等云云。夫一代四十餘年が間なかりし大瑞を現じて、法華經の迹門をとかせ給^ヒぬ。其上本門と申^スは又